

巻頭言

神戸看護学会・設立の経緯

Establishment of the Kobe Academy of Nursing Science

林 千冬

Chifuyu Hayashi

1. 平成27年4月：ワーキンググループの立ち上げ

「開学 20 周年を機に、ぜひ私たちの学会をつくりたい」——本学の鈴木学長の熱い思いを受けて学会設立ワーキンググループ（以下、WG）が設置されたのは、平成 27 年 4 月のことでした。メンバーは、グレッグ美鈴教授、河井伸子准教授、柴田しおり准教授、山下正助教、そして林の 5 名。老若（？）取り混ぜての賑やかな WG となりました。

平成 27 年 6 月 2 日に第 1 回ミーティングを開催し、1 年間の計画を決定。まずは、看護系大学が中心となって設立した先行する学会について調査し、その結果を踏まえて設立案を作成。学内ならびに市民病院群と神戸市看護大学同窓会の合意を得て、学会設立にこぎつける…といった大まかなスケジュールを立てました。幸いにも大学から教育・研究振興費の助成をいただくことができ、早速、他学会の調査を開始することになりました。

2. 7～8月：他学会へのヒヤリング調査

1) 「学会を通して引き継がれる価値を創造する」

全国の関連学会の中からヒヤリング調査をお願いしたのは、千葉看護学会、高知女子大学看護学会、そして岩手看護学会の 3 学会でした。調査内容の詳細を定め、メンバーの知己を頼ってコンタクトを取り、平成 27 年 7 月 1 日、トップバッターとしてグレッグ教授と河井准教授が千葉看護学会を訪ねました。日帰りの強行軍に PC を携行し、帰りの新幹線車内で見事に報告書を仕上げってしまったという河井准教授のパワフルさは、後々まで WG の語り草となりました。

7 月 14 日には第 2 回ミーティングを開催。千葉看護学会への調査結果報告を受け、続く 2 つの学会ヒヤリングに活かすべく、設立準備に向けてさらに検討を要することがらを検討しました。報告では、千葉看護学会設立当時の関係者の熱い想いとご尽力の経緯に触れ、我々も身が引き締まる思いでした。また、すでに看護系学会が数多く存在する中で、あえてなぜ新たに学会を新設するのが問われること、「学会を通して引き継がれる価値を創造すること」の重要性を知ることができました。そして、これについての十二分な議論と明確な目標の設定が、学会の存続と発展のために不可欠であることを認識させられました。

2) 「同窓生とつながる・地域とつながる」

続く 7 月 30 日には高知女子大学看護学会を、8 月 7 日には岩手看護学会をヒヤリングのためお訪

ねしました。高知には柴田准教授と林、岩手には山下助教と林の2名での訪問でした。

高知女子大学看護学会は、看護系学会の中でも歴史ある学会のひとつですが、ここでのヒヤリングでは特に、大学同窓会とのつながりの重要性和それを維持する方策、大学院修了生の学会誌投稿促進の工夫、さらに地域の看護職者に大きく開かれた学会大会の運営方法などを参考にさせていただくことができました。

一方、岩手看護学会はまだ若い学会ですが、母体である岩手県立大学は県内唯一の看護系大学として地域貢献活動が非常に盛んな大学で、学会運営においても理事に地域の看護職者を据えるなど、地域とのつながりを重視した学会運営のあり方が大変参考になりました。

これらのヒヤリング結果を土台に、WGの学会構想を徐々に固めていくことができました。ヒヤリングを快く受け入れ、多くのご示唆を下された関係者の方々—千葉大学の石橋みゆき先生、高知県立大学の森下安子先生、岩手県立大学の山内一史先生と千田睦美先生には、記して感謝申し上げたいと思います。

3. 11月：神戸市民病院群ならびに大学同窓会への説明とヒヤリング

他学会ヒヤリングを通して、学会設立の理念や具体的運営のイメージが明確になり始めた頃、最後に、神戸市民病院群ならびに大学同窓会に説明に出向き、学会への要望等についてヒヤリングを行いました

平成27年の11月9日に西市民病院、12日に西神戸医療センター、16日に中央市民病院の関係者にご意見を伺いました。その結果、いずれからも地元で学会が出来ることは大変メリットがあると学会設立への賛同をいただき、また、市民病院群だけでなく、地域の様々な施設の看護職や、さらには他職種にも参加しやすい、ハードルの低い学会であってほしいこと、事例報告や実践報告等の場づくり、研究に関する教育企画の開催等々、具体的な要望や貴重なご意見をいただきました。

11月14日には、神戸市看護大学同窓会の吉川会長ならびに松井副会長（いずれも当時）に面談。お2人には冒頭から、「学会を同窓会結集の軸としたい。大いに歓迎」との明確な賛意をいただくとともに、入会勧誘や各種案内の郵送等、合同でできることは協力して行い、双方にとって効率的な運営を目指していこうとのご提案をいただきました。

4. 11月17日：「学会設立に関する意見交換会」の開催

以上のヒヤリング調査結果を踏まえ、平成27年11月17日に、学内での意見交換会を開催しました。これは、よりよい学会とするために学内教員からの意見・提案を集約する場であることはもちろん、より多くの教員から学会設立への理解と協力を得るためにも要となる会合でした。

意見交換会は、WGからのヒヤリング報告と提案の後、教員間で自由にグループをつくり意見交換を行ってもらうという流れにしました。WGからは、(1)学会名、(2)学会の目的、(3)事業、(4)会員資格、(5)学会活動、(6)学会費・学術集会参加費について具体的な提案を行い、これらも含めた学会設立に関するあらゆる点について、率直な意見交換を行ってもらうよう呼びかけました。そして、グループワークでの討議はすべて録音し、WGの資料とさせていただくことを了解してもらいました。

5. 平成28年1月：WGのまとめと提言

平成28年1月26日、先の意見交換会のまとめにWGからの提言を加え、WGとして以下のような最終報告を行いました。

1) 学会運営への懸念と対応策

4月にWG立ち上げ以降、学会設立については様々な疑問や懸念が寄せられていました。先の意見交換会ではその点についても率直に話し合ってもらい、WGとして以下のような対策を提言し、ひとりでも多くの学内教員が納得づくで、決してDutyではなく“私たちの学会”として進んで参加してもらえるよう努力しました。

(1) 教員の全体的な仕事量が增大する。運営・継続のエネルギーがあるか・持続するか？

➡事務作業の業者委託のための資金を確保し、教員の負担を減らす方策を検討する必要がある。また、学会運営にエネルギーが必要なことは当然である。これについては(以下、2)で述べるような学会への様々な期待に応え、魅力ある学会作りをひとつずつ実現させることを通してエネルギーを持続させていきたい。

(2) すでにある「大学研究紀要」と学会誌の棲み分けをどうするか。紀要投稿が減少してしまわないか？

➡これについては早い時期から懸念の声があがっていた。そこで、WGは紀要掲載論文の内訳を詳細に検討し、その結果、修士論文は紀要ではなく学会誌へ、共同研究費助成を受けた研究は学会誌ではなく紀要へと振り分け、それ以外に、授業の評価研究等の紀要投稿を促進することで、両者の共存は十分可能であるとの結論を得た。

(3) その他、学会誌の学術性の高さは、臨床からの投稿をし辛くしている。臨床家や学生など幅広い層が参加しやすい、魅力ある学会づくりになるか等々、裏を返せば魅力ある学会づくりへの要望につながる懸念も多数出された。

2) 魅力ある学会づくりに向けて一学会への期待・学会が果たすべき役割

意見交換会では同時に、学会への期待も込めて、有益な提案が多数出されました。これらは、以下のようにまとめられ、今後の学会の運営・企画に大いに活かしていきたいと考えています。

(1) 大学院修了生の学会発表や学位論文投稿の機会の提供

・修了生の学会発表や論文投稿、特に課題研究論文の発表の場として活用する。学会誌の場合、査読期間が1年くらいになるが、期間短縮も追求していきたい。

(2) 大学院のPRと志願者確保

・大学院の受験資格のひとつである「筆頭論文」掲載の場として活用したい。
・大学院での研究活動を広く紹介する機会としたい。

(3) 学部卒業生の研究への志向性の維持増進

・卒業生の身近な学会として、学部での研究演習の成果発表の場として活用するなど、研究に対するモチベーションの維持につなげていく。研究演習の成果発表の場ができれば、これから研究演習に臨む在学生にとってもよい学習機会となるであろう。

(4) 卒業生、修了生、学内教員との多彩な交流の場

・学会活動・学術集会等は卒業生や修了生が大学に立ち寄りきっかけとなるため、同窓会活動への参加につなぐことができる。
・学術集会は、学部生、院生、修了生の交流の場となり、学部教育への活用や将来の院生確保にもつなぐことができる。また、CNSの業績づくりの場としても活用できる。

(5) 臨床実践を価値付ける場の提供・実践と研究との循環の促進

・実践報告や業務改善事例等、新しい取り組みを発表できる場とする。これによって、研究のシーズを見出す場とすることができる。
・若手看護師が直接研究者と触れ合うことで、臨床での研究活動の動機づけになる。

- ・分科会や交流集会を通じて臨床と研究者との交流を活性化する。
 - ・分野を限定しない看護の総合学会であるため、さまざまな専門分野との交流の場にもなる。
- (6) 「身近な学会」のメリットを最大限に発揮
- ・物理的にも精神的にも身近な学会として、発表・投稿しやすい場とする。
 - ・大規模学会と違って、少人数でじっくり時間をかけて交流できる場を設ける。特に、研究疑問や研究計画の段階でも、意見交換やディスカッションできる場が設けられればよい。
- (7) 神戸市の看護の質向上
- ・地域の看護の学術面での水準を向上させることができ、ひいては看護の質向上につながる。

6. WG から初代理事会へ

平成 28 年 1 月 12 日に WG 最後となる第 7 回のミーティングを行い、学会会則案の検討、学会入会案内や入会申込書フォームの作成に加え、口座開設、メールアドレスの開設やホームページ開設の見通し等、学会設立に必要な具体的な事務作業について話し合いました。そして、会則案と会員募集案内を 1 月末の拡大教授会で報告したのち、初代理事メンバーの選出を理事長にお願いし、WG から初代理事会へ役割を移行することが確認されました。

WG メンバーも何人かが理事として残留し、年度の切り替えを挟んで、学会設立作業は途切れることなく続きました。学会設立時点というのは、当然、会員はまだいないわけですから会費納入すなわち財源もない。今後どのくらい会員数が見込めるかもわからない。学会印もなければ口座もない etc. と、文字通り無い無い尽くしの中で、なんとか 4 月 1 日、無事学会発足に至りました。

規約や用紙づくりの失敗談、数え切れないほど郵便局を往復した口座開設の苦勞等、今となっては笑い話ですが、振り返れば WG 活動の 1 年は、様々な学会活動経験を持つメンバーの英知を集め、周囲の方々の協力をいただきながら、とにかく無我夢中で駆け抜けた 1 年だったと感じます。

以上を振り返ってみて、この過程で確認されたさまざまな役割や期待そして懸念を忘れてはならないと改めて思います。学会がわれわれの豊かな学術活動推進の場となり、卒業生・修了生の幅広い抛り所となり、実践家と研究者との有意義な研究交流の場となり、ひいては神戸市の看護の質の向上に貢献できるよう、「神戸看護学会」ならではのユニークな活動を、これから大いに展開していきたいと思えます。